

Illustration / 笹井 一個

# 佐藤友哉

『私のひよろひよろお兄ちゃん』

『対ロボット戦争の前夜』

『サオミに捧ぐ 愛も汚辱のうちに』

# SARINJYA-NINE STORIES

●本文使用書体／本明朝 -Book 新小がな



『鏡家サーガ』ついに『ファウスト』初登場!

『群像』2004年8月号に  
掲載されるや否や  
文芸界の話題を一身に集めた

『チェリーフィッシュにうってつけの日』  
『小川』のほとりて』につつき放たれる、  
佐藤友哉自身の「文学的守護神」

J-D-サリンジャーに対する  
無謀にして果敢なる挑戦。

## 掲載、

これぞvs. サリンジャー!  
これぞ  
vs. 『ナインストーリーズ』!!

# 私のひよろひよろ お兄ちゃん

(二〇〇六年九月)

いろいろな主義主張が飛びかう世の中だが、学校祭は本番よりも準備中の方が楽しいというのは、ほとんどの人間が抵抗なく受け入れる、いわば真理のようなものだ。その楽しさの本質はしかし準備作業ではなく、普段は校内では絶対にやってはならない行為……夜遅くまで学校に残っていると、お腹が空いたからといって菓子を食べるとか、友だちと無制限にお喋りするとかを、全面的に許可されているところだった。

コンビニから戻ってきた由実子は、談笑と作業音に包まれた廊下を進み、三年七組の教室のドアを開けた。蛍光灯の光が広がった室内には、佐奈がポツンと座っていた。到着の遅れを非難するように、あくびをかみ殺しながら由実子を見ている。由実子はコンビニ袋を机に置き、すべてはまったく完璧にいつて、レジに並ぶまでは大丈夫だったと弁解した。レジがどうかしたのかと佐奈

が聞くと、由実子は急に困ったような声になり、ポテトチップスの中身がどうこうと、何かわけの解らぬことを云つて、コンビニ袋をひっくり返した。佐奈は頼んでいた焼きそばパンを見つけて礼を云つた。由実子は佐奈の机の正面に椅子を運んで、制服のスカートにシワを作らないように注意深く腰かけた。

それから二十分後、学校祭準備をサボった二人は、菓子とジュースの匂いをまき散らしながら、小学校から中学校の現在にいたるまでのほとんどと一緒にすごしたクラスメイト独特の、おそらくは彼女たちでなければ通用しまいと思われる口調で語り合っていた。

「ところで、今何時？」

「こりやおどろき！」佐奈は本当におどろいたように目を丸くした。「ちよつとふり返れば、時計は見えると思うんだけどな」

「それが面倒だから聞いたわけ」

「そりやおどろき。ええと、あともう少しで七時だよ」

佐奈は教室の壁にかかった時計を確認した。



「あともう少しって、あと何分さ」

「あともう少しは、あともう少し」

「私が世の中で一番嫌いな人間って知ってる？」由実子はポテトチップスをくわえた。「時間を聞いたときに、正確に答えられない人間よ」

「六時四十七分」

佐奈は携帯電話の液晶ディスプレイを確認した。

「ほら見る」由実子は勝ち誇ったような顔になる。「何が、あともう少しで七時だよ。七時になるまで十三分もあるだろう」

「たつたの十三分じやんか。由実子ちゃん細かいよ。京都の伝統工芸品だよ」

「たつた？ あんたは十三分のことを、たつたって云うわけか？ 十三分あれば、インスタントラーメンを四個も作れる」

「四個まとめて作れば三分ですむけど」佐奈はすぐに云った。「由実子ちゃんは、インスタントラーメンをまとめて作らないタイプなんだね？ 一分一分を大切にしろ」

十分も遅刻しちやつてさ。こつちがうんざりするまでしてもらいますからね！ 由実子ちゃんの内申点に傷がついたって何さ」

佐奈は必要以上に真剣な表情になると、表面張力を駆使して紙コップいっぱいにオレンジジュースを入れた。由実子は口を近づけてオレンジジュースを一口すすり、コップを手にして教室の窓へと歩いていった。カーテンを開けて窓枠に手を置く。窓の向こうには濃い暗闇が広がっている。本物の暗闇を学校で見るのは初めてだった。

「私はね、学級委員なの」由実子は振り返った。「ウチのクラス、何やるかあんた知ってた？ おぼけ屋敷だつてさ。おぼけ屋敷おぼけ屋敷おぼけ屋敷……はん、何回云つても変わりやしない」

「それ、十回ゲーム？」

「何ですって？」

「私のクラスは喫茶店だから、学祭当日になるまで、ほとんどやることないよ」

ながら、一個一個を丁寧にするわけか。ふむふむ」

「馬鹿にしてるのか」

「確認してるだけ」

「確認？」

「私たちにも違うところがあるっていう、確認だよ。そつかさつつか、時間に対する貴重性が違うのか。佐奈ちゃんはそんなこと、考えたこともありませんにやー」

「にやーって云うな」

「にやー」

佐奈はペットボトルをつかみ、由実子の紙コップにオレンジジュースをついだ。

「私はその一杯でおしまいだからな。そろそろ準備に戻らなくちゃ。私はあんたみたいに暇じゃないのに、わざわざ……」

「えっ？ 冗談は顔だけにしてよ」

「私の顔が冗談みただって云うのか！」

「そういう冗談なの」佐奈はすぐに弁明した。「つていうか、お話ししようって云つたのはどつち？ おまけに三」

「でも由実子ちゃん、今年は中学最後の学校祭だから、思いきりがんばるって云ってなかつた？」

「確かにがんばるとは云つたけど、でも楽はしたいの」

「難しいね。複雑なお年ごろですにやー」

「にやーって云うな。それに複雑なもんかよ。ねえ佐奈、これ一杯で本当におしまいだからね」由実子は紙コップを小さく振った。「あ、そうだ。先週誰に会ったと思う？ デパートの一階でさ」

「だあれ？」

「奈保子。小学校のときに一緒だった」

「どつちの奈保子？」

「どつちかな。顔のかわいい方」

「どつちもかわいかったしなあ」

「じゃあほら、あれだよあれ。給食当番の子を……」

「ピコーン！ それ衛藤さんの方だ」

「そうそう、そっち」

「でもどうして北海道にいるの？ 奈保子ちゃん、親の都合で愛媛にいったはずだけど」

「愛知」由実子は訂正した。「それがね、あれだつてさ。お父さんが死んだんだつて。舌ガンで。八十キロもあつた体が最後には三十八キロだつて。だから今、お母さんの方の実家にいるらしいの」

「学校は？」

「そこまでは聞いてない」

「そう……」佐奈は自分の舌を甘くかんだ。「この世には、一緒に生きられる人と一緒に生きられない人がいるからね」

「悲しい問題だな」由実子は佐奈のもとに戻った。「まあ、たとえそうだとしても、私は前者になるつもりだから。一緒に生きられないなんて、そんなの悲しいからね」

「由実子ちゃん、横浜の高校を受験するんでしょ？」

佐奈の言葉におどろき、由実子は思わず足をとめて、

はつぶやいた。「私が云いたいのは、何ていうかさ……まいつちやうなあつてこと。通じたかな、この意味」

「もちろん」

「ひゅー、さすがは由実子ちゃん。鏡佐奈の理解度選手権で常に一位を獲得して……」

「私以外に、お兄さんのことを話せる人がいないしね」

由実子は自分の意地悪な言葉が持つ効果を期待して佐奈を見たが、しかし佐奈は視線を無関係な方向に向けていた。由実子もそちらに目を向けると、いつの間にか開かれたドアの前に、同級生の弥生が立っていた。

手入れをしていない短い髪。分厚い近視の黒縁眼鏡。やせ細った体。何となくだらしない制服の着こなし。

片方だけずり下がったソックス。そんな姿を基本にして、いる弥生は、右手に持ったドライバーを器用に回しながら、学校祭準備を抜け出して菓子パーティーを開いている二人を見つめていた。

「はろー」佐奈は意識的に笑顔を浮かべた。「あの、弥生ちゃんも食べますか？ ポッキーとかあるけど……」

ポテトチップスをつまんでいる友人の顔を一瞥する。しかし佐奈の表情は、由実子の進学に関して執念深く怒っているように見えなかった。だからといって、口だけでもなさそうだ。

「だつて、仕方ないだろ」由実子はとりあえずそう云つた。「これは悲しい問題じゃなくて、頭の問題。私は頭が良い。それをちゃんと使いたい。でもあんたは……」

「ふん、どうせ私は馬鹿ですよ。学年順位も大したことないですよ。足も速いですよ」

「足は関係ない」

「そんなことないのです。癒奈お姉ちゃんが、足の遅さと賢さは比例するつて云つてたのです。足を使つて問題から逃げないで、頭を使つて問題を解決するからだつて」

「なるほど」

一理ある意見だと思つた。

「別に横浜にいったからつて、友だちが終わるなんて思つてないよ。そこんとは、ちゃんと解つてる」佐奈

「いらない」

「そ、そう。弥生ちゃん、甘いものは駄目なのかな？」

「あたし、人に物をもらうのは嫌なの」

弥生は断言するように云つたので、佐奈は言葉が続けられなくなつてしまい、それをこまかすためにポッキーの箱を開けた。

「何か用？」由実子は自分の口調が鋭くなつていることに気づいた。「用がないなら帰つてくれないかな。もし

かして、水入らずの邪魔になつてるのが解らない？」

「由実子ちゃん！ そんな云い方は……」

「まあ、あんたは空想のお兄様にぞつこんだから、私たちにかまつてる暇なんてないだろうけどさ。どこにいくにも一緒に、優しい優しいお兄様。大変なお熱だな」

「空想なんかじゃない」

「じゃあ妄想だ」

「妄想なんかじゃない。本当にいるもの」

弥生は背中を掻いた。

「本当にいるつて？ おもしろい。おもしろくない。あ